

文学は生き延びられるか

——又は高等教育とは何か——

栗 坪 良 樹

(1) 死者は記憶されることで生きる

(1)

小説は何のためにあるのか、文学は何のためにあるのか、文学研究は何のためにあるのか。飢えたる子どもに文学は如何なる力をもつのか、登校拒否（不登校ではない）する子どもに文学は如何なる力を発揮しているのか、何故人を殺してはいけないのかと問いかける子どもたちに文学者は彼らを納得させる力を持っているのか。お前は何のために生きているのか、お前は何のために学問をしたのか、お前は何のために学校で働いているのか、お前は何を生きがいにして生きているのか、お前は死ぬことの恐怖を感じたことがあるのか。お前は教壇に立って教えることに感動を覚えているのか、お前は教員であることを演じているだけではないのか、お前は自分の考えではない他人の言説をなぞって生徒や学生をたぶらかしているだけではないのか、一体全体お前には人を教えるという全人格を賭けた資格があるのか、お前のやること為すことが、子どもたちや若者たちの将来・未来を閉塞させることになっていることに気付いているのか、お前は奇麗ごとを言って聞いている他人が白け切っているのに自己陶醉しているだけではないのか。お前は老残をさらして生きるに生きられず死ぬに死ねない自分自身の未来像を幻視したことはないのか、お前は美しいもの豊かなもの人類の知恵と叡智の究極に一回でも触れたことがあるのか、お前は一回限りの人生をただひた

すら享樂に明け暮れて無為の生涯を迎えるだけではないのか。

順不同のこれらの問いかけは、私自身がこの時代に生きて、この年齢であって、この職業に就いていることの全体から湧き出してきた問いかけであって、実際に生徒、学生から答えを迫られたこともはらまれている。これらの問いかけは、私が学校の教員であることと大いに関係するとはいいながら、その職業から離れていたとしても、(人間として)生き続け考えることをしてきた不特定の人々と共有することの出来る問いかけと言っている。究極的には教員であるとか、大学に学んだといった経歴や履歴とは何の関わりもない問いかけである。

昭和十八(一九四四)年一〇月二日の学徒出陣の壮行式の映像がことあるごとに脳裡をかすめて過ぎる。教場から戦場へ学生たちを送り込んだこと、言わば自分が教えている学生たちを死地へ追いやったことに倫理的責任を感じた教員が如何なることを感じていたのであつたか。何故このことが今さらながらに氣にかかるかと問われれば、私たち大学人がそれとよく似たことを今日意識するとせざるとに拘らず行っているからと答えることが出来る。厳しい社会の現状のさ中へ、就職して自活することを大目標にしているとはいふものの、心を痛め身体を酷使する戦場のような世界へ学生たちの背中を叩いて押し出している光景が浮かんできくるのだ。

ここに一冊の岩波文庫がある。日本戦没学生記念会編『新版 きけ わだつみのこえ——日本戦没学生の手記』(一九九五・一二)がそれである。この文庫の前身は、東大学生自治会に設けられた戦没学生手記編集委員会編『はるかなる山河に』(一九四七・一二、東京大学消費生活協同組合出版部)にあり、段階をふんで一九八二年七月、〈旧版〉の岩波文庫版が刊行された。〈新版〉には〈旧版序文〉として渡辺一夫「感想」が再録されている。本書は太平洋戦争下の前線において、道半ばにして死んでいった学生の手記(遺書)を編集した出版物として歴史的な意味をもっており、〈旧版〉の文庫の後に『第二集 きけ わだつみのこえ——日本戦没学生の手記』(一九八八・一二)も刊行されている。

敗戦五十有余年の二十世紀末から新世紀にかけての今日、これらの《戦没学生》の手記をどのように読むか、それは個々人に任されていることには違いない。《新版》の『新版 けい わだつみのこえ』の読者へ」という序文には「死者は記憶されることで生きる。時代の推移と状況の変化にもかかわらず、読者に受けとめようとする誠実な意志があるかぎり、戦没学生のどの言葉も、読者の胸に刻まれるにちがいない」と記されている。この《新版》を編み直した《日本戦没学生記念会(わだつみ会)》の人々は、二十世紀末のいわゆる《バブル崩壊》後の一九九五年のその時点において、不特定多数の読者に向けて「死者は記憶されることで生きる」と言いつつ読者の《誠実な意志》を喚起している。これを時代において今日の世に問おうとした《わだつみ会》の人々の中には、当然死んでいった朋友と共に死すべきはずであった人々、偶々生き残って半世紀を過ぎて今日に至ったという人々が多数ではないにしても含まれていないはずはない。生き残った者の死者への鎮魂、それは際立って倫理的な問題を投げかける。神宮野球場における雨中行軍の儀式を終えて前線に赴いていった学生たちの歴史的残像が脳裡から離れない。彼らを見送った大學生、彼らの背中を戦場に向けてひと押しおした教員の倫理的な問題と重なり合う問題でもある。

《わだつみ会》の人々、死なずにすんで功なり名をとげ日本の経済発展を促し、なおかつ今日の抜き差しならぬ混沌かつ行方定めぬ日本の世紀末を作り出した人々の何人かが、戦争で死んでいった朋友は、《記憶されることで生きる》と自分に言い聞かせるようにして不特定多数の読者に訴えかけていると読める。

(2) 他殺死の前線に追いやった者は誰か

私事にわたるが、二年前の暮れのことだった。東京では進学校として名の通っている高校に招かれて生徒に向けて話をする機会があった。今では特定の週刊誌以外に東京大学合格者の順位序列の報道でひと騒ぎするということは下

火になっている。その時すでにそうであった。高校三年のある生徒が、自分は受験して大学に進むつもりだし、どこを受けても合格する自信はある、だが何故大学に行かなくてはならないのか、以前中学・高校の教員であったというあなたに答えてほしい、というのであった。両親にも、教わっている先生たちにも同じ質問をしているが納得のゆく答えが返ってこない、とも言った。私は、その問いかけを聞きながら、〈神戸児童連続殺傷事件〉後、何故人間が人間を殺してはいけないのか、という問いかけを中学生・高校生たちが大真面目にテレビや雑誌などで言いいつのっていることを連想した。簡単に言ってしまうえば、自己形成の手順や階梯が抜け落ちたまま、いつの間にか十四歳、十五歳、十六歳、十七歳を経てしまったという若い人々が突然つき当ってしまった壁のような大問題がそこにあると思った。換言すれば、自分を社会化したり客体化する手段、つまりは自我を形成する〈ことば〉を獲得出来ないままにそのまま来てしまった青年の表情を見たように感じた。私は、君の問いかけが真剣のものであるならば、直ちに学校を辞めて一年間働いたらどうか、大学受験を一年見送ったらどうか、と答えてみた。次に、何故働らかなくてはならないのか、という質問を予想したが、それはなかった。私の答えに意表を衝かれたのであったかも知れない。〈アガリ〉のない〈双六ゲーム〉のさいころをふり続けてきた青年の姿がそこにあると思った。

〈学徒動員〉から半世紀を経て、生と死の間に立たされて死を決意せざるを得なかった五十年前の青年たちと、自分が今どこに存在して何処へ行こうとしているのか判然としない青年たちとの間に大いなる懸隔があるとは思えない。〈ハムレット〉風の独白で言えば〈このままでいいのか、それともこのままでは駄目なのか、それが分らない〉といった内面的課題だけが明瞭である。五十年前の青年たちは偶々〈歴史〉の推移に助けられて、それ自体は悲劇的だが〈手記〉(遺書)という手段をもって自己を表わす〈ことば〉を残した。彼らの〈ことば〉は決意と意志を表現している。それから五十年後の青年には〈歴史〉が判然としない。刻々と変化し猫の目の如く変わる政治、社会状況、離合集散をくり返す政治家たち、官僚たちの不始末の数々、逮捕され続ける企業の重役たち、これらが毎日の新聞のトッ

プニースであり続け、青年にとつては意志と目標を決しようにも、決しようとするさきから土台が崩れてゆく。敗戦から五十有余年、子どもたちや若い人々はどのような〈歴史〉を強いられてきたのか。この問いかけは自分の半生の検分なしには片付かない。

『新版 きけ わだつみこのえ』には、〈旧版序文〉として渡辺一夫の「感想」が再録されていることはすでに述べた。この文章の末尾には「一九四九・八・三一」の日附が記されている。この〈手記〉が岩波文庫の第一版に行き着くまでの自ずからなる時間を感じさせる。渡辺一夫はこの文章の最後のところで〈若くして非業死を求めさせられた学徒諸君のために、僕は、心から黙祷を捧げたいと思う〉と書いて、一九四三年にフランスで刊行されたジャン・タルジュの詩集『詩人の光栄』から次のような詩を訳出して掲げていた。

《死んだ人々は、還^{かへ}ってこない以上

生き残った人々は、何が判^{わか}ればいい？

死んだ人々には、慨^{なげ}く術^{すべ}もない以上

生き残った人々は、誰のこと、何を、慨^{なげ}いたらい？

死んだ人々は、もはや黙^{もく}ってはいられぬ以上、

生き残った人々は沈黙を守るべきなのか？

渡辺一夫が、自ら訳したこの詩句に自身の倫理感を重ねていることは疑う余地がない。今日に至るまで、私のような戦中世代から遠く遅れている世代にとつても歴史的残像として写真や映像として記憶されている〈学徒出陣〉壮行

式を経て、渡辺一夫の表現で言えば「自然死ではもちろんなく、自殺でもない死、他殺死」を迎えざるを得なかった学生たちに対する鎮魂が、いわゆる渡辺一夫に強い倫理感を強いている。ただ鎮魂すればいいというのではない。型通りの倫理感を吹聴すればいいというでもない。アリバイ証明のように鎮魂や倫理感を吹聴する者は、いつの時代にも存在するものである。渡辺一夫の「感想」は、学生を「他殺死」の前線に追いやった教員としての自分に向けた見えない刃を感じさせている。

(3) ユマニスムなるもの

渡辺一夫はその「感想」中に次のような条を記述している。

《僕は、本書があらゆる日本人に、特に最近の戦争のことを忘れてけろりとしている人々に、のんきに政争ばかりしている政治家に、文化生活を謳歌する紳士淑女に、深遠な学理に耽る大学教授に、命令一下白い棍棒や長い竿をふるう警官に、裁判所へ「人民様のお通り」と叫んで赤旗ふりかざしながら突入するモブ（群衆／暴徒）に、娯楽雑誌以外は本など全然読まぬ実業家に、幼い頃「楓のような手をあげて」「兵隊さん万歳」と言ったことのある今の若い学生諸君に……読まれてほしいと思う。》

この記述が「一九四九」年、つまり昭和二十四年というその時点であるにしても、「戦争のことを忘れてけろりとしている人々」という表現は、五十年を経た今日に至るも皮肉な響きを失っていない。「のんきに政争ばかりしている政治家」、「文化生活を謳歌する紳士淑女」そして「深遠な学理に耽る大学教授」など、今日の大学人にまでその衝撃を確実に伝達しようとしている。要するに、五十年前から政治家も文化人も大学教授も自己目的化した利己主義の固まりとなって、歴史状況を見ようとしていないという告発がここに書かれているということに他ならない。

渡辺一夫は、この「感想」をこの時点にわかに思いついて記述したのではなかった。大江健三郎、清水徹編、岩波文庫版『渡辺一夫評論選 狂気について―他二十三篇』（一九九三・一〇）に注目されるいくつかのエッセイが収録されている。

「トーマス・マン『五つの証言』に寄せて」というエッセイは、〈T先生〉すなわち辰野隆に宛た手紙という形式をとり（昭和二十一年（一九四六年）二月二十八日）の日附のある文章である。この文章を読む限り、渡辺一夫は敗戦直前まで死ぬことを覚悟してトーマス・マンの著作の訳出を後世に残すべく訳業を重ねていた様子である。〈「一億玉碎」するにしてもマンを識っている人間が一人でも二人でも生き残れば、すべての可能性は保持されると思ったのであります〉、〈私はこのマンの訳稿を常にポケットに潜ませ、「本土決戦」に備えていたのであります〉と書き記す渡辺一夫は、〈マンの思想〉から受け継いだ〈近代現代のユマニズムの思想〉を次のように自身に課していたのであった。

「……ユマニズムなるものは、たとえそれがいかに「甘く」且つ「無力」でありましようとも、いやしくも学問や思想に生きようと志した人間は、飽くまでこれを護らねばならぬものと考えますが、それでよろしいのでしょうか？」

(7)

この反問を辰野隆先生に向けて発しつつ、〈先生からご批判を受けたい〉と思いつつ、〈私の個人的な身の振り方〉についても先生の意見をうかがおうとしていたというのであった。この時の渡辺一夫の〈身の振り方〉とは、〈東大を辞任したいという願い〉であったと自ら注釈をつけている。またしても、神宮雨中学徒出陣壮行式の残像が重なって見えてくる。渡辺一夫は東大の助教授として、太平洋戦争末期に一度は死ぬことを決意したのであったが、死なずに生き延びた、その生き延びたという厳然たる現実に対して如何なる態度をとるべきか、それもまた一つの知識人の〈戦争責任〉の問題であったと思える。渡辺一夫の注釈によれば〈辞任〉を申し出た際、辰野隆は〈傲慢〉である〉

と叱ったという。

「狂氣について」は(Juin 1948)の年月が記されたエッセイである。〈……我々は、「天使になろう」として豚になりかねない」存在であることを悟り、「狂氣」なくしては生活できぬ存在であることを悟るべきかもしれません〉と言いつつ、渡辺一夫は〈豚になるかもしれないから、豚にならぬように気をつけて、なれないことは判っていても天使にაცოგაれ、誰しもが持っている「狂氣」を常に監視して生きねばならぬ〉と述べている。その背後に次のような論理を隠していることに注目しなければならない。

『十六世紀のエラスムスという大学者は、『痴愚神礼讃』という風刺書を綴りました。これは、「狂氣」をほんとうに讚美したものでなく、「狂氣」にとりつかれてそれを自覚せず、自他の「狂氣」のおかげで甘い汁を吸っている様々な人間が、「狂氣」の女神を礼讃せざるを得ないという趣旨で書かれた皮肉な人間風刺書です。』

半世紀を経た仏文学者の文章は、時空を隔てて迫りくるものがある。〈「狂氣」にとりつかれて」いるにも拘らずそのことを自覚せず、〈自他の「狂氣」のおかげで甘い汁を吸っている様々な人間〉が、〈「狂氣」の女神を礼讃せざるを得ない〉という状況は、今日の私たちの足下を照らしていることでもある。

(4) 高等教育機関の現況

日本の高等教育機関すなわち大学、短期大学、高等専門学校は今日約一三〇〇校に及んでいる。これとは別に専門専修学校が大小とりまぜて浮き沈みがあるものの三千とも四千ともいわれる数が目白押しで控え、専門専修学校から四年制大学の三年に編入する道も開かれ、高等教育機関のシステムそのものが混沌としてきた。大学生、短大生であってもこと次第によっては専門専修学校に「ダブルスクール」するといった傾向も当たり前になったと見ていい。折も

折、本年「国勢調査」(総務庁)が行われたが、学歴の項には「中学卒」「高校・短大卒」「大学・大学院卒」といった選択肢が堂々と項目化されており、その一方でこれまでは「高等教育」として大学、短大は一括されていたのであったが、この二年ほどのうち「短大・高専」は「短期高等教育」として括り出されてしまった。それとは別に「短期大学」の「短期」という字句を取り去り「短期大学」も「大学」であることを強調しなければならぬという論調や運動も高まりつつある。学業修得年数・年限の二年、三年、四年ということが絶対であるようで絶対ではないにも拘らず、学歴年限でことがらを絶対視しようとする紋切型は、時代の変化率の基盤を見失っているに等しい。五歳から七歳までの間に小学校入学を迎えるのは、それぞれの自由裁量とする、理数科に独自の才能のある者は飛び級をさせる、十五歳で大学入学を認可する、大学三年をもって大学院受験を許可する、といった議論が公の機関の議論として新聞等を通して流布すること自体、すでにその方策が追究されてやがてそうなることを意味する。

一三〇〇校の高等教育機関に、今日、高等学校を卒業する約五〇パーセントの生徒が進学することになっている。中学校から高等学校へ進学する生徒は今日九七、八パーセントほぼ百パーセントと言われている。その一方で、小学校から高等学校の児童生徒の「不登校」(登校拒否)者は約百五十万人と言われる。これは少なく見積つての数字で、学校を拒否している気分の持ち主、予備軍を含めるとその三倍四百五十万人と言う人もいる。「学級崩壊」「学校崩壊」といった「崩壊感覚」が、日本の初等中等教育を満たしているということを凝視する必要がある。学校には登校しているものの教室に出られず保健室で勉強する光景はどこでも見られる光景になった。学校を拒否している児童生徒は、ひたすら「ファミコン」などゲームと戯れて、夜と昼を転倒させ、流行のタレント歌手のCDを聴くなどして一日一日を日めくりをめくるように型通りの生活を送っている。

一九七〇年から三十年、二〇〇〇年のこの年は三島由紀夫が歿して三十年でもある。七〇年の時点で、「教育の自由化」「教育の商品化」「教育の投資化」ということが叫ばれ、文字通りの「教育の大衆化」現象が当然のこととなっ

ていった。一九五〇年代の中端には、中学から高校へ進学する生徒が約五〇パーセントであったことは知っておく必要がある。今日、高校への進学はほぼ「義務教育化」され、高校から大学・短大・高専へ進学する生徒が、四〇年前の中学から高校へ進む比率とほぼ同じものになり、「教育国家」日本としてその威信を誇る状況が出現したというわけだ。「教育の機会均等」が実現されてゆくこと、それはそれで良し。その「機会均等」の向上は、次々と高校を増加させ、さらに短大をその上に増加させ、さらにまたその上に大学を上乗せしていった三十年が、この三十年であったと見ていい。高等教育機関への進学は学校を増加拡大させ、収容定員の員数の拡大を計り走り続けたので、文字通り「教育の自由競争」時代を迎え、教育機関の序列化が熾烈なものになって今日に至っている。この場合の高等教育機関の評価基準は何か。こういった効率を計るような議論について、私たち大学人は案外に眼を反らしている。しかし刻々とこの手の評価基準は情報産業の基幹の情報として売り買いされていることを知る必要がある。『リクルートカレッジマネジメント』などは、表向きには大学の立地条件や教員と学生の比率や学生の気質や学校の教育方針などを掲げていることを年中行事にしているが、さらにその背後には教員の資質や学校の財政状況などを踏まえて将来予想を年々刻々行っていることは間違いない。大学人は、この手のことは理事会の責任範囲であって我関せずといった気分になりかかっているが、その反面で教授会主導で小田原評定をくり返し、学校全体の将来性方向性を没社会的な立場から批評批判して、絵に描いたような理想論を述べて口をぬぐっている。これが大学人の一般であるというのが私の目下の観測である。誰も否定不可能な理想論、本質論、人間論そのものが、ことと次第によっては頹廢そのものであるということはあり得ることだ。

(5) 何故大学・短大に進むのか

大学は何のためにあるのか、何故大学に進む必要があるのか、大学は確実に学生の将来を開いてやれるのか。大学に籍を置きながら何故学校に出校しないのか、何故学生は授業中に私語するのか、学生の学力が低下したというが学力とは何なのか、学生は何処から来て何処へ行くかとしているのか。

高等教育の大衆化とその究極は、定員を満たすために受験してきた生徒を全員入学させることに限りなく近づくことである。急増してゆく大学・短大に合せて学生だけが大量化していったわけではない。大学人そのものが大量化した知識人として序列化されていったことはごまかしようがない。四年制の大学教員が短大の教員を低く見ることは、知識人にもその勤め先次第で序列が存在すると思ひ込んでいるからに他ならない。私たちが教育した卒業生たちが、就職した会社で四年制出身者から見下げられるということは、日常茶飯のことながら、年々働らきを重ねて自身の役割を認めさせてゆく働らき手も多数存在している。問題は、自身の役割を弁えるということであって外部的評価に振り回されたり支配されたりすることではない。四年制大学の教員になりたいがために短大を四年制の大学に転換させるという論理は、しばしば見受けられるが、言語道断というべき自己目的化した共同体を私物化する論理というべきだ。短期大学を四年制化するためには手順を尽さなければならない。〈構造改革〉という表現は、政府主導の表現で例えば〈財政構造改革〉〈行政構造改革〉〈省庁構造改革〉等、何と言っても結びつきやすい表現であろうか。この伝に習って言えば、高等教育においても〈制度構造改革〉ということが必然的に迫られているのであって、その鍵を握っているのは、入学してくる学生の〈学力〉である度合よりも学校の構成要員である教職員の頭脳の中身の問題ということが言えよう。刻々変化し続ける時代状況やその時代状況に染められて育ってきた学生たちのメンタリティに眼が

向いているかどうかで話の方向すなわち「教育構造改革」の内容はまるで違ったものになってしまう。

極端なことを言えば、応募者が定員に満たず、全員合格とした場合でも私たちは学校を守るだけの熱意や使命感や教育の方法をもてるかということにかかっているということに他ならない。今がその時ではないという安楽を決め込むのではなくて、常に今がその時だ、という覚悟が問題となる。短期大学を改組転換して四年制大学にしたての大学あるいは百年以上の伝統を誇っていた四年制の女子大学であって、ここ一、二年のうちに思いもよらぬ試験に立ち向っている大学は、折々マスコミに喧伝されて益々不利な立場に立たされているが、それ故に教職員の底力が試され、その力がものを言う。優れた立場や条件にあぐらをかいていないだけ彼らの力は強い。

教育もまた、美術家や小説家が作品を生み出すことと同様に「文化的行為」と考えたという。学生の育ちや経てきた経歴、その能力も千差万別と考えたという。今日、ほぼ高等学校も「義務教育」化の方向をたどっているとすれば、大学・短大に進んでくる学生の能力、言うところの「学力」もその分だけ細かく序列化され階層化されてゆくことは必定であって、その序列化の上部構造だけを対象にするのでなければ、大学・短大ではないということにはならない。これまで以上に学生の個性性に丁寧な指導をほどこす目的意識がなければ、高等教育としての機能をほとんど放棄するに等しいことになる。学生に対する奉仕の度合いがいつそう試されるということに他ならない。

極めて現実的な話になるが、大学の一コマの授業おおむね九十分前後の時間に学生が支払っている金額は、学校間格差があるにしても一万円前後の金額ということになる。歌舞伎座の一等席料金に接近する料金を支払って授業を受けている学生が平気で欠席し、なおかつ他人の迷惑にもおかまいなしで私語するとは何事であるか、ということを年々中言っただけで聞かせる必要もない。しかし、学生たちは二年、三年、四年間をモラトリアム期間として結果として社会に出てゆくことになる。そこで、大学・短大で緊張感をもって過した者とさにあらざる者との落差が拡大してゆくことになる。

今日、大学・短大を卒業した者で就職する者は大学・短大に差はなく約六〇パーセントとされている。ここ十年々々その数値を下げて、来年は五〇パーセントに割り込むかと予想されている。大学の場合は約一〇パーセントが大学院に進み、短大においても専攻科進学、編入がほぼ一〇パーセントとされ、約三〇パーセントの卒業生は、大学・短大において対等に〈無業者〉を決め込んでいることになっている。

(6) 自分と向き合い、他人と向き合う

相変らず、大学・短大は何のためにあるのか。人の一生、生まれて生きてそして死んでゆく、その大いなる生命の内において生涯かかって為すべきことは如何なることか。再び言えば、小説は何のためにあるのか、文学は何のためにあるのか、大学・短大で文学を学ぶということに如何なる意味があるのか。文学は生き延びられるのか。

どんなに小さな小説あるいは評価されずに消滅する小説であったとしても、それが表現されて残されたという事実がある限り、作者の生きた証を投影した〈歴史的所産〉と考えたい。〈ことば〉を知らず、話の出来ない幼児であったとしても誕生のとたんに〈ことば〉の渦中におかれ、モノとモノの名前を結びつける最も初歩的な〈ことば〉の学習に始まり、原色で描かれた絵と二、三行、数行の〈ことば〉の連なりで書かれた絵と小さな物語を母親に読み聞かされて、絵本の世界に入ってゆく。くり返し読み聞かされるお話の世界が幼児の頭脳に刷り込まれ、〈ことば〉が形成する〈虚構〉の世界に慣れ親しんでゆく。次第に〈ことば〉が口について発せられるようになり、モノと名辭とがしっかりと結びつき、自身で文字を読み習わず世界が開かれて、読み聞かされていた絵本を自分で読むことになり、見て聞いていた絵本の世界を自分の力で再構成可能となって、次々と読破する習慣が始まってゆく。大学・短大の教場で講じられる小説、物語、文学の世界の最も原理的な通過儀礼はそこに端緒があったと見ていい。やがて文字の量

と絵の量とが半々となり、それが逆転して文字の渦の中に挿絵が一定の分量でさし込まれ、やがて絵は消えてしまふ。しかし、〈ことば〉を読んで頭脳の中に像を思い浮かべる行為は、ほとんど習性となっており、そのことの習練の行きとどいた子どもは、砂地に水が沁み込むように〈ことば〉の世界に馴染んでゆく。読むこと、書くこと、話すこと、聞くことが初等中等教育の初期から継続され続け、高等教育はその延長線上にある。

恐らく、今日おおかたの人々によって指摘される〈学力〉低下論に原因を求めるとすれば、〈ことば〉の世界の破壊がその因と考えられる。出版界を眺めれば、雑誌主導の時代が年々深化してゆき、小さく組み上げられた活字〈ことば〉の世界はそれとの対照で後退の一途をたどっていると見える。文字が詰まってしかも漢字が多い本は、文字通り読むに耐えないというのが子どもたち、若い人々の本音であろう。大版の雑誌は読むためにあるのではなく、流通消費の情報を提供する見る媒体であって、〈ことば〉を知らぬ幼児が母親との二人三脚で体験していた絵本に等しい。〈ことば〉を通して〈形象〉されたものを思い浮かべるといふ学習が遮断されて、一方的に与えられる写真やモノの像、テレビに直せばコマージュ主導の〈映像〉によって頭脳が占有されてゆく。言うところの〈仮想現実〉がより一層現実的であるという世界が児童、生徒、学生の今日の世界と言ってもいい。私たちは、それでもなおかつ、小説や文学は必要かというところに立たされている。

そこへもってきて、子どもたちを〈仮想現実〉の世界に溺れさせる遊戯が、日本の経済効率の先端を為すようでありながら、義務づけられた小学校、中学校の教育は旧態依然とし続け、二一世紀早々には〈インターネット教育〉を徹底することによって旧態から脱出することが目論まれている。〈IT革命〉が子どもたちの知的好奇心や知の枠組を転換させる大いなる力となるとする幻想がまず先行してはいるが、正直に言って何が〈革命〉なのか不分明であることに変わりはない。〈情報技術〉の革命は同時に〈遊戯技術〉の革命であり経済効率の深化であることもまた確実であることは、今日の〈携帯電話〉の盛況が物語っているようか。

企業人は、新人採用に際し学生たちの〈コミュニケーション〉能力が著しく低下していると異口同音に指摘する。大学人が学生の〈学力〉低下を嘆いている構図と何ら変わるところがない。一体、大学ではどういう教育をしているのか、と問い質される。新世紀に向けて、初等中等教育の〈国語教育〉については、話す、書く、聞く、読むという能力を高めることが努力目標とされている。当然のことを当然の如く掲げなくてはならないところに、あえて言えば日本の〈国語事情〉があるというわけだ。携帯などで〈デジタルことば〉に慣れ親しんでいるというものの、ほとんどそれは一方的に互いに交信し合っている遊戯に等しく〈コミュニケーション〉の能力が開発されるということでも何でもない。その種の能力を高めるとすれば、話すこととしては相手と向き合う過程が必須であり、書くことによつて、自分自身と向き合うことが欠かせない。聞くこともまた相手と自分を比べる行為であるし、読むこともまた新たに自分を見つけないとすることが接続している行為である。総じて〈国語〉の努力目標の基盤には、自分と向き合い、他者と向き合うということが意識されていなければ意味をなさない。読むこと、話すこと、書くこと、聞くことを掲げながら、その命題が子どもたちの技術や技能問題に至小化され、個々の問題に還されないままに、やがてマニユアル化した問題に埋没してしまわないかと先を危ぶむのだ。

(7) 風化して駄目になる文学

私たちは、いつどのような際に、自分と向き合ったり、自分の外部に存在する他者と向き合うのだろうか。学校もまた個人が集合して成り立っている共同体であることを常々心にかけているであろうか、学生の勝手放題を嘆く教員そのものが勝手放題ということはないであろうか、商業主義の甘いワナに引っかかって苦渋をなめる学生同様に、マスコミ主導的教育論や教育行政論に乗せられて、理念のない改組転換を叫ぶ教員は存在しなかったであろうか、とり

わけ四年制の大学は生き残るが、短期大学なら廃絶するような錯覚に陥ってこなかったであろうか、アングラ情報で組織状況をいくらでも作りかえることに高を括ってこなかったであろうか、決定権をもっている人にすり寄って議論などをせずに状況を作ってこなかったであろうか、二股をかけて自己責任をいつでも回避出来る立場に立って身を乗り出すことを等閑してこなかったであろうか、一方からだけの情報や言い様で他方を切り捨てて党派性に安住してこなかったであろうか。いずれも大学を一つの共同体組織と考えた場合の自己反省を含んだ経験論の一部の問題である。

共同体組織は、現実感覚や現実認識、目的意識の個性性によって組み立てられてゆく一種の構造に等しい。刻々の変化が現実であるとすれば、その変化を受けとめ受けとめた状況を抽象化する論理が求められ、そこに構成員の力が試されることになってゆく。組織構造を支える個々人は、学問的には言うに及ばず教育者としても学校行政者としても鍛え上がっていかなくてはならない。責任を負った何人かの教職員に下駄を預けてしまつて我関せずを決め込む構成員が少なれば少ないほど共同性は強められてゆく。

高等教育機関に限らず共同体組織の浮沈はかかつて構成員の気合にかかっている。大学・短大は入学してくる学生の活力と教職員そして同窓生の活気がものを言う。卒業していった同窓生の行方をどれほど把握し、なおかつ連動した活動が組織されているかが試される。教職員には定年が存在するが、同窓生には定年がない。その同窓生が還ってこられる学校として常時門戸が開かれているようではなければならない。そのような関係を究極のこととすれば、二年制か三年制か四年制かという年限で高等教育を計る思考は限りなく軽くなる。問題は年限だけのことではなく、組織構成されたカリキュラムの緊密度の問題に他ならない。時代の変化に合わせてしかも伝統を喪失していないカリキュラムによって教場における〈教える〉〈教えられる〉という教員と学生の関係が緊密であるかどうかの問題でもある。

再び、三度文学は何のためにあるのか、文学は生き延びられるか、大学教育に文学部は必要とされるのか。この種

の問いかけは、時代的転換、刻々変化する国家構造、それは国際化という美名に隠されて、文字通り外発的に構造改革させられるといった印象から逃れ難いままに問いかけられ続ける。問いかけられたとたんに問いかけられた側は、これに然るべき回答と理念と姿勢を示さなくてはならない。回答がなければ、問いかけた側は問いかけた当事者に然るべき意志なしとみて、これを淘汰してゆく。文学研究を自己目的化して文学教育の教えることと教えられることを限りなく無視し続ける研究者が、その淘汰を結果的に推進することは確実である。

私たち大学教育人であって、文学研究、文学教育に携わる者が、例えば次のような状況下に置かれていることを自覚出来ているかどうかが問われる。一人の人物が、〈文学一般の方向〉は「ますます風化してゆくのか」と問いかけている。それに対してもう一人の人物は次のように答えている。

「いや、ますますだめになるんじゃないだろうか、というふうにおもわれます。文学には、どうしても究極までいってしまえば、二つ軸があつて、とにかく、読者というか、他者というかわかりませんが、それを振り切って、振り切って、どんどん振り切っていっちゃって、一人も読者なんていうのはいなくなっちゃう方向と、パターンとパターンをどんどんつなげていけば、これは無限に、つまり文学自体が読者そのものになつてしまふというか、どうしてもその二つの方向はいつでもつきまとつて、それがどちらの方向に行くかということは、その時代時代ということになるわけでしょうけれども、どう考えても、風化してだめになる方向が、今のところよくみえている、とおもえるんですよ。」（意識 革命 宇宙、一九七五・八、『群像』）

四半世紀前に〈現代文学の方向〉を見据えた二人の対話、問いかけたのは壇谷雄高であり、これに答えたのは吉本隆明である。私たちが直面している〈文学〉状況そのものは、この議論の延長線上にあることは疑いようがない。

(8) 近松も西鶴も芭蕉もない時代

二人の哲人のような議論は必ずしも「文学」論に終始していたわけではない。政治的「構造改革論」「革命」論、それとの関係における「内ゲバ」論など、彼らの語る状況論は多岐にわたっていた。吉本隆明は今日「文学」を語る人というより、ますます自身の生きている世紀末状況を踏まえた予言者のような哲人的風格を強め、状況論のない文学などほとんどるに足りないといった論理を強めていると見える。一九七五年の議論に還して言えば、吉本は「現代文学の方向」の一方に、一人も「読者」の存在しなくなる方向性を見定め、もう一方に「文学自体が読者そのもの」になる方向性を見定めていたと読める。それらの方向性は一つのことであって二つのことではなかった。いわゆる創造ということとは無関係にある種の「パターンとパターン」をつなぐことによって生ずる「文学のようなもの」が存在するにしても、創造的産物、歴史的所産としての「文学」の発生の余地は着実に稀薄化していつてしまう時代状況、へどうしても袋小路みたいなものに入らざるを得ない。時代状況を敏感に察知して、そうした時代状況の「むずかしさ」を「なんらかの意味で、創作自体として解いていくというふうな作家が、今後、いまより若い年代にあらわれてきたら、希望は希望ですよ」とも言って「希望」を辛うじてつないでいたのでもあった。

三島由紀夫の「文化防衛論」の文末には、「昭和四三、五、五」という日附が附されていた。吉本隆明が「現代文化」の「風化」を論じわずかに「希望」をつないでいた一九七五年より七年前に書かれた三島の「文化論」は、ほとんど淡々と「絶望」を説いていると読める。ただし、身を捨てて浮かぶ瀬もあれ、ということ言えば、その「絶望」は志のある後世の者に向けた「希望」の書でもあって、書かれているその内容には、その二年後に書いたその人が意を決して自裁した人物であり、死より二年前とは言いながら、すでに死ぬ覚悟が読みとれなくもない。

三島由紀夫は、その冒頭において〈昭和元禄〉などと称して浮かれている同時代を指して〈文化的成果については甚だ心もとない元禄時代である〉と称している。〈近松も西鶴も芭蕉もない昭和元禄には、華美な風俗だけが跋扈している〉と言つて次のように続けていた。

『情念は涸れ、強靱なりアリズムは地を払い、詩の深化は顧みられない。すなわち、近松も西鶴も芭蕉もない。われわれの生きている時代がどういう時代であるかは、本来謎に充ちた透徹であるにもかかわらず、謎のない透明さともいふべきもので透視されている。』

先述した吉本隆明の〈文学風化論〉は、より拡大された視野の下に、〈謎のない透明さ〉すなわち全てがあっけらかんと素透しに形骸化の極致に至ってしまったと評されているに等しい。さらに続けて次のように言う。

『どうしてこういうことが起つたか、ということが私の久しい疑問であつた。外延から説明する、工業化や都市化現象から説明する、人間関係の断絶や疎外から説明する、あらゆる社会心理学的方法や、一方、精神分析的方法にわれわれは飽きている。それは殺人が起つたあとで、殺人者の生い立ちを研究するようなものだ。』

三十数年後の今日、三島由紀夫がここで述べている風潮まさしくことがらを〈外延から説明する〉風潮はますます顕著となっていることは我々がよく知っている。つまりは我々が無自覚にそれに慣れてしまった当事者でもあることを、三十数年前の三島の指摘によって知らされているわけだ。ところが我々のこの時代は〈殺人が起つたあとで、殺人者の生い立ちを研究する〉ことに〈飽きている〉どころかますますそれに拍車をかけて、吉本流に言えば〈パターンとパターン〉を限りなくつないで飽きて当然の〈物語的文学〉のような世界に安住快感を感じ尽くすことを日常化してしまっている。三島由紀夫は、さらに鋭く私たちの時代状況に侵入してくる。

『何かが絶たれている。豊かな音色が溢れないのは、どこかで断弦の時があつたからだ。そして、このような創造力の涸渇に対応して、一種の文化主義は世論を形成する重要な因子になった。正に文化主義は世をおおうてい

る。それは、ベトベトした手で、あらゆる文化現象の裏側にはりついている。文化主義とは一言を以てこれを覆えば、文化をその血みどろの母胎の生命や生殖行為から切り離して、何か喜ばしい人間主義的成果によって判断しようとする一傾向である。そこでは、文化とは何か無害で美しい、人類の共有財産であり、プラザの噴水の如きものである。』

(9) フラグメントと化した人間

言うところの豊饒な文化は決定的に涸渇欠除してしまったことによって、一種の〈文化主義〉が、〈世論を形成する〉現象が〈文化〉そのものであるような錯覚時代に突入してしまっていることを鋭く衝いている。〈母胎の生命や生殖行為〉すなわち〈文化生成〉の手順や手続、生みの苦しみが無いままに〈喜ばしい人間主義的成果〉を讃美するような時代が当然のこととなってしまったことを淡々と絶望的に衝いている。三島由紀夫はこの時点で〈IT革命〉や〈仮想現実〉が新世紀の〈文化〉支配の究極であることを知ってはいない。今出たばかりの芸能タレント、十代前半の少女たちを商品化して売りまくる芸能主導の経済効率率が、マスコミが支配する〈文化主義〉で、まさしく〈無害で美しい〉、かてて加えて〈可愛い〉ものが日本人の〈共有財産〉であり、日本の〈文化主義〉であることを、三島は見聞しているわけではない。競技場や広大な空地に何万人という若い人々を集ませ、一気に何億何十億という集金能力のある芸能タレントすなわち現代の〈アーティスト〉を三島は見ているわけではないが、ほとんど我々同時代人以上にその究極を衝いている。〈プラザの噴水〉の如き芸能主義の背後には、実は離合集散をくり返す政治的党派主義が隠されており、政官財の癒着などという古典的技法よりは、〈アーティスト〉と組んだ方がはるかに潤沢な経済効率をあげられるということは、朝から夜中までテレビを見たり、日々のスポーツ新聞を見ればよく分かる

ことだ。大学・短大に進んだ学生たち、とうてい芸能タレント（アーティスト）になれるはずもなかった若い人々が、就職期に際して〈マスコミ〉志望などとうわ言のようなことを言うのも〈プラザの噴水〉の一飛沫現象に過ぎない。三島由紀夫は、ますますシニカルに絶望を語り続ける。

《フラグメントと化した人間をそのまま表現するあらゆる芸術は、いかに陰惨な題材を扱おうとも、その断片化自体によって救われて、プラザの噴水になってしまふ。全体的人間の悲慘は、フラグメントの加算からは証明されないからである。われわれは単なるフラグメントだと思ってわれわれ自身に安心する。》

《全体的人間の悲慘》を凝視してしまっていた三島由紀夫、それを換言すれば〈日本の悲慘〉を見てしまっていた三島に等しい。見るべきことを全て見てしまったから、あとは死ぬしかない、とした平家の公達にも似た位置に立たされた表現者がここに存在している。断片化した個人としての安息と安住に耐え切れなくなったから三島由紀夫は自殺したというのではない。次のように続けている。

《悲慘も、いかなる悲慘であろうとも、断片の範囲を出ないからであり、脱出はわれわれの能力外のところにはあるが、立派にのこされているからであり、われわれの不能に酔うことと脱出に酔うことは一致しているからである。》

私は、このところまで読んで、どこまで行っても〈断片の範囲を出ない〉自身が〈日本の悲慘〉を見てしまった以上、その状況下から〈脱出〉しなくてはならないものの、それは同時に〈能力外〉ということがすぐさま現実化するのので〈不能に酔うことと脱出に酔うこと〉とは同義である、というジレンマを超越してしまった三島由紀夫の心境を追体験することが出来る。この流れ全体に三島の〈倫理感〉の究極を感じとることが出来るということでもある。

三島由紀夫が「文化防衛論」を書いている時、すでにこの作家の最後の小説である『豊饒の海』四部作は構想されていたことは想像に難くない。最後の小説は、日本の近代から現代の歴史を背景として、しかも現実界と冥界とが混

消するかの如き虚構の世界を形作り、三島自身〈不能に酔うことと脱出に酔うこと〉とを実践したかの如き世界を構築したと見えている。それは、見るべきことを全て見てしまった表現者が完璧を期して虚構の世界に〈脱出〉を計ったに等しく、それは仮に自身によって〈不能〉の出来事であったにしても、死ぬための通過儀礼として書かずにはおかれなかった小説世界と考えられる。

私は、そのような三島由紀夫の小説を究極の小説と見立てて、三島が見抜いてしまった〈日本〉という国家の内懷に、虚構化された〈国家〉を作り出す行為をばらむ小説と見て、〈国家の中に国家を作る小説〉と考えてみた。

表現行為は積み重ねていけば、一筋道の軌跡が生じ、好むと好まざるとに拘らず〈倫理〉を強いてくる。口説の徒があちらでAと言いつつ、こちらでBと言いつののとは違って、表現行為が記述行為と連動すれば、その種の背理は限りなく許され難いものになってゆく。

10 絶望の国からの脱出

再び三度文学は何のためにあるのか、小説は果して二十一世紀に存在し得るのか、虚構と仮想現実とはどのような相違があるのか、小説家とは娯乐的消費作品を量産することを職業とする存在のことか、小説作家の倫理性とは如何なることか。

私たちは量産され消費される書物や雑誌の渦の中に生活していることは事実である。再び如何なる小説も〈歴史的所産〉であることを確認した上で、表現世界に置換しなければ現実として捉え難い模糊たる曖昧さの内に生きている私たちは、何を媒介にして現実の本質に迫り得るのだろうか。子どもたちの犯す犯罪は〈少年法〉によって果して抑止出来るのかという以前に、何故子どもたちは犯罪を犯すのか、人を殺すのか、しかも最愛の肉親や通りすがりの人

物を冷静に淡々と殺すのか、挙句の果てに何故人を殺してはいけなかなどという問いを幼児のごとく発し続けるのか、そのような渦のような問いかけを誰が相対化しつつ全体的に答え得るのか。

ここに一冊の小説がある。村上龍『希望の国のエクソダス』(二〇〇〇・七、文藝春秋)のキャッチコピーには、
 〈2002年秋、80万人の中学生が学校を捨てた〉とある。村上龍は読者に向けて〈現代について考えるとき、もっとも暗澹とした気持ちになるのが教育とメディアの現状です。コミュニケーション・信頼が基盤になる教育とメディアが機能不全を起こしている現実をどう捉えるのか? 金融・経済・ネットコミュニケーションに関わる約三年に及ぶ取材がすべてこの作品に活かされています。現代を巡る絶望と希望を書き尽くす、という動機でこの小説を書き続けました。その成否は読者の判断に委ねようと思いますが、この物語を書き終えたときの言いようのない充実感と不安感、24年間小説を書き続けてきて初めて味わうものでした。〉というメッセージを送っている。すでに吉本隆明が、
 〈現代文学〉の〈袋小路〉を〈創作自体として解いていくというふうな作家〉が〈若い世代〉に現われてきたら〈希望は希望です〉と言っていたことを述べておいた。さらに〈日本の悲惨〉を見てしまった三島由紀夫が死を賭して〈絶望〉を語ることによって〈希望〉を後世に予感させ、〈脱出はわれわれの能力外のところにはあるが、立派にのこされている〉とも書いていたのであった。

村上龍の『希望の国のエクソダス』は、漂流し続ける日本から中学生たちが、〈エクソダス〉(脱出)する物語であり、三島由紀夫が三十有余年前にささやかに書き記した小説家の生き延びる道を新世紀の物語として描いたものでもあった。〈パキスタン政府の管理の及ばない地域〉に土着して〈パシュートン族〉の一人として十六歳の日本人の少年がCNNの取材を受けるところから小説は始まる。〈日本のこととはもう忘れた〉と言う少年は言葉を継いで〈あの国には何もない、もはや死んだ国だ、日本のことを考えることはない〉と言いつのる。世界中に流された彼の映像は、日本の中学生たちの内部に飛び火して彼らをして学校を〈脱出〉させる。彼らは日本中に〈ネットビジネス〉を展開

し、その勢いは世界中に波及してゆく。法律で決められた〈義務教育〉の制度が存在することによって学校に行かなくてはならない、という紋切り型の正論を否定した〈不登校〉（歴然と〈登校拒否〉であるのだが）中学生たちが、〈インターネット〉を逆手にとって八十万人の彼らが理想郷を目指す。そのリーダー格の中学生は次のように言う。

「愛情とか欲望とか宗教とか、あるいは食糧や水や医薬品や車や飛行機や電気製品、また道路や橋や空港や港湾施設や上下水道施設など、生きていくために必要なものがとりあえずすべてそろっていて、それで希望だけがない、という国で、希望だけしかなかった頃とほとんど変わらない教育を受けているという事実をどう考えればいいのだろうか、よほどバカでない限り、中学生でそういうことを考えない人間はいなかったと思います。」

消費経済の走狗にさせられ、初等教育から教育されることが〈希望〉の名を冠せられた〈絶望〉であることを、この小説は実に明快に描いている。小学生の内に〈インターネット〉を駆使出来る教育を完璧に完結させ、新世紀の人材資源をそれによって確保して、次世代の世界経済戦争へ戦士を送り込んでゆく〈日本国〉からの〈エクソダス〉、それが村上龍の描いた二年後の〈2002年〉から始まる中学生たちの叛乱劇でもあった。

高等教育に携わる大学人が、この近未来小説、小説とは言いながら空想ではなくて、日々刻々その予兆のように地殻変動している中学生や高校生のメンタリティをどのように予知しているか。そのことが告発されている。吉本隆明が〈風化〉を説き、三島由紀夫が〈絶望〉を表明してから三十余年を経過した文学状況に全く新たな時代の小説、中学生たちが国家が志向する〈インターネット教育〉を逆転させ、国家の支配を逃れて北海道に理想郷をうち建てるといった小説世界が出現したのである。

この理想郷（ユートピア）小説、〈国の中に国を作る小説〉の志を生かすか殺すか、それが教育人に問われ続ける問いかけであり、相変らず私たちの〈倫理〉が問われ続けていることでもある。